

【学校教育ビジョン】	<p><今年度の重点></p> <p>1 自ら課題を発見し、主体的対話的な学びで課題解決する力の育成【2条】</p> <p>2 豊かな道徳性を育成する道徳教育の推進【6条】</p> <p>3 学校の組織力と教職員の指導力向上【10条】</p>	<p>○基礎的基本的な知識・技能を活用する力の育成 ○自ら課題を見つけ主体的に対話的に解決しようとする力の育成 ○家庭学習の充実</p> <p>○学びのある道徳授業の実践 ○特別活動や各教科等と関連させた道徳教育 ○読書の量と質を高める指導</p> <p>○教職員が自己の役割を明確にし、組織的・機能的学校運営を推進 ○密な報告・連絡・相談</p> <p>※【2条】は、いしかわ学びの指針12か条「学びの12か条+」を表す。 □今年度の重点目標を表す。</p>
------------	---	--

評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果 (中間)	判定結果 (最終)	今後の改善策
①教育課程・学習指導	授業で得た知識や技能を活用し、問題解決することができる。【2条】	「いどみA・B」の時間を設定し、論理エンジンやアイテム算数、過去問等を使い、読む力や書く力(活用力)の向上を図る。また、活用力向上のためにICTを有効に活用する。	教務 (鳥屋) 各担任	論理エンジンやアイテム算数を使った活用力の向上に取り組んでいる。解説の際に問題解決のポイント明確にすることを意識している。問題を解く時間と解説の時間を確保し、結果のフィードバックが即時にされるようにしている。	【成果指標】 該当学年の各学期ごとの活用力問題に対して理解できている。	4教科の活用力を見るテストのクラス平均が A 80%以上である B 60%以上である C 40%以上である D 40%未満である	活用力を見るテストの結果を学期ごとに集計	B	B	4教科の活用力を見るテストのクラス平均が70%であった。国語82.6%に対し、算数が54.5%と低い。アイテムの活用やチャレンジ問題、過去問等に取り組むことで様々な考え方を身につけさせる必要がある。学年により力の差があるが、基礎基本の力をしっかりとつけた上でそれを生かす力をつける必要がある。学年に応じた対応をしている。
	主体的に対話的な学びで課題を解決する力を育てる。【2条】	学び合い学習や児童会活動、係活動、サークルタイムなどを通して、主体的に自分の考えを発表したり、友だちの考えを参考に意見を述べたりし、課題を解決する力をつける。話から出て自分の言葉で語れるようにしていく。ふり返りの充実を図る。	教務 (鳥屋) 各担任	「聴き方・話し方・語り方」を「話をつなげる3つの言葉」などの学習ルールが定着してきた。また、カードでグループが全体交流のポイントを示すことで、自分の考えを発表し交流できるようになってきた。さらに、主体的に対話的な学びで課題を解決する力を育てる必要がある。	【満足度指標】 「学び合い」学習ルールを意識し、ふり返りを充実させるなど主体的対話的に課題を解決しようとしている。	主体的対話的に課題を解決しようとする児童が A 90%以上である B 80%以上である C 60%以上である D 60%未満である	1・2学期末に児童・教職員を対象とした学び合いアンケート調査	B	B	児童対象の学び合いアンケートでは、どの項目も80%以上と高い値を示している。ペアやグループでの話し合いの約束も学年に応じて身に付けてきた。また、ペアやグループでの話し合いの約束も学年に応じて身に付けてきた。しかし、考えを深めることが苦手な児童がいること、話し合いが意見交流で終わってしまうこともあるので、考えを深める発問を教師がさらに工夫していくことが大切である。
	考え、議論する質の高い学びのプロセスを重視した道徳授業の実践を基盤に、人権教育の視点を重視した授業実践力をつける。【6条】	児童が思わず考え込んでしまうような発問の工夫や、思考を構築・再構築させていく指導法や手立てを充実させていく。また、人権教育の視点や重点目標の意識化を図り、「補充・深化・統合」を意識した授業や道徳ノートの活用を行い、実践意欲と態度を育み、特別活動や各教科等に関連させていく。	研究 (可部谷)	「考え、議論する道徳授業」の実践を通し、主体的な学び合いの力が付いてきた。主体的な学び合いを、特別活動や各教科に関連させ、人権を意識していく必要がある。	【満足度指標】 道徳を基盤に他教科でも、児童が主体的に考え、他者と議論する質の高い学び合いを、さらに再構築できる。	考え、話し合うことを通して自分の考えを深めている児童が A 90%以上である B 80%以上である C 60%以上である D 60%未満である	1・2学期末に児童・教職員を対象にアンケート調査	A	A	「やさしい聴き方あたいたい話し方」を中心に聴くこと話すことの基本が定着してきた。また、ペアやグループでの話し合いの約束も学年に応じて身に付けてきた。しかし、考えを深めることが苦手な児童がいること、話し合いが意見交流で終わってしまうこともあるので、考えを深める発問を教師がさらに工夫していくことが大切である。
	ふるさとについて学び、理解を深め、児童のふるさとを愛する心を育てる。	「地域のよさ再発見・自分の夢探究」(6年)「生命や自然」(5年)「全てのの人にやさしい町づくり」(4年)「地域のよさ発見」(3年)をテーマにかけ、探究したくなるような課題の設定、振り返り活動を実施する。	総合的な学習の時間担当 (濱崎) 各担任	児童はふるさとに対して愛着があり、ふるさと学習に関心がある。昨年は各学年でふるさとに関する学習を進めていたが、その内容の深まりは不十分であった。今後、ふるさと学習の充実が求められる。	【満足度指標】 ふるさと学習に意欲的に取り組み、ふるさとのよさに気づくことができる。	ふるさと学習に意欲的に取り組む児童が A 90%以上である B 80%以上である C 60%以上である D 60%未満である	1・2学期末に3年生以上を対象に学校評価アンケートを実施、調査する。	A	A	90.2%の児童が、ふるさとのよさを見つめようとして調べたり、まとめたことと回答した。3学期以降も、地域のよさや地域の人々のよさを見つめることができるように、目標を実現するにふさわしい探究学習とその振り返り活動を進めていく。
②生徒指導	読書活動の楽しさを知り、自ら進んで読書する子どもを育てる。	学校図書館で週1冊以上を借りることを月目標とし、全校で読書マラソン(低学年一人150冊、高学年一人5000ページ)に取り組む。また、並行読書を進め、読書の質の向上も図る。	図書 (作田)	月目標達成を目指して、全校で取り組む体制は出来ている。国語科での並行読書のための蔵書を増やす必要がある。読書目標(低学年150冊高学年5000ページ)については、記録の煩雑さから記録があまりない児童が多いため、記録の煩雑さをなくす必要がある。	【成果指標】 毎月の目標冊数の達成や並行読書を進め、意欲的に読書活動に取り組んでいる。	月目標の本を借り、並行読書の目標を達成する児童が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	児童の貸出記録を調査する。	B	A	毎月の月目標は100%近く達成することができた。平行読書(おすす30冊)の本も1学期に比べ、読読した児童の数が大幅に増えた。週末読書の課題や「家庭カード」をすすめたことで、少子家庭でも読書に取り組む児童が増えているが、「ゲーム」や「YouTube」などを見る児童が多くなっている中、読書の楽しさを伝え、読書好きと思える児童が増えているよう手立を考える必要がある。
	誰に対しても自分から進んで気持ちのよいあいさつをする子ども、自他を大切に、どんな場面でも相手を思いやる言葉遣いや行動ができる子どもを育てる。	児童会活動で全校あいさつ運動や笑顔カードの取り組みを実施し、年間を通して自主的に「笑顔で元気に相手の目を見て」あいさつできる子どもやどんな場面でも相手を思いやる言葉遣いや行動ができる子どもを育てる。	生徒指導 (上木)	児童は、自分から進んであいさつすることができるようになっている。しかし、声が小さく自分から進んであいさつができていないという課題やどんな場面でも相手を思いやる言葉遣いや行動ができていないという課題がある。	【成果指標】 地域や家庭、学校で、自分から進んで気持ちのよいあいさつや言葉遣いをする事ができる。	進んで気持ちのよいあいさつや言葉遣いができる児童が A 90%以上である B 80%以上である C 60%以上である D 60%未満である	1・2学期末に児童・教職員・保護者を対象にアンケート調査	B	B	95%の児童、90%の保護者があいさつがよいと回答した。自分から気持ちのよい挨拶をしている児童をさらに増やしたい。挨拶名人の取り組みを強化して継続して取り組む。言葉遣いについて意識させる取り組みの結果、言葉遣いが良いと回答した児童は81%と多くなり、保護者は77%から72%へ減少した。今後も休み時間や放課後、家での言葉遣いについて、保護者と協力して言葉遣いを向上させる取り組みを行っていく。
③進路指導・キャリア教育	いじめ問題について、未然防止・早期発見・早期対応のために学校全体で組織的に対応する。	児童に関する事案や外部からの情報について、いじめ問題対策チームを中心に報告・連絡・相談を密にし、組織的・協働的に対応することで、いじめや不登校の未然防止・早期発見・早期対応に努める。	生徒指導 (上木)	友人関係の固定化、グループ化により、対人関係で悩んでいる児童は多い。児童の悩みを敏感に受け止める機会を適切に設け、いじめや不登校の未然防止・早期発見・早期対応となる積極的な取り組みを組織的・協働的に進める必要がある。	【努力指標】 いじめの未然防止、早期発見・早期対応に向けての取り組みが、組織的・協働的に行われている。	A 90%以上である B 80%以上である C 60%以上である D 60%未満である	1・2学期末に教職員を対象にアンケート調査	A	A	いじめ問題について組織的に対応していると回答した教職員は100%であった。このうち、組織的に十分対応していると回答した教職員が60%、おおむね達成できているとの回答は40%であった。自己の悩みを表現する機会を設け、いじめ問題の未然防止に向けて、お話しタイムで児童の対人関係での困り感を聞き取り相談など教職員全体で対応していきたい。
	よりよい人間関係を築きながら、自分のよさに気付かせるとともに、学習が将来につながることを理解し、意欲的に取り組む子どもを育てる。	学校生活の充実をめざして、児童会活動、縦割り団活動、学級活動、どの学年も自主的・主体的に取り組めるような手立てを実施する。授業や行事においても、教師がキャリア教育の視点を意識し、計画的に指導するとともに、活動後の振り返りを充実させ、価値づけを図る。	児童会 (濱崎) キャリア教育 (鳥屋) 各担任	児童会や学級活動に、自主的・主体的に取り組む児童が多いが、自己有用感に関しては個人差が見られる。授業や行事において、児童が自分のよさに気づくことのできるような取り組みを意識し、行っていく必要がある。	【努力指標】 自分のよさを知り、意欲的に取り組もうとする児童が A 90%以上である B 80%以上である C 60%以上である D 60%未満である	自分のよさを知り、意欲的に取り組もうとする児童が A 90%以上である B 80%以上である C 60%以上である D 60%未満である	1・2学期末に4年生以上を対象にキャリア教育アンケート調査	A	A	自分のよさを知り、それを活かして活動していると回答した児童は、91%であった。このうち、いつも以上と回答した児童は、58%、時々以上と回答した児童は33%であった。判定はAではあるが、自分のよさに気付いていなかったり、気付いてもそれを活かして活動していない児童が9%いる。自己理解を深めるための宝物ファイルの取組を継続し、児童が自分のよさに気づき活かし手立てしていきたい。
④保健管理	自分から進んで運動をする子を育てる。	げんきの時間で、金明マラソンやなわとび、スポチャレに取り組んでいる。1校1プランで策定した計画を実施したりすることを通して、生涯にわたって積極的に体力向上に努める態度を育てる。	体育 (敦澤)	子どもたちは、それぞれの目標を持ってげんきの時間に取り組んでいる。全児童が継続して取り組めるよう、工夫改善しながら実施する必要がある。	【努力指標】 子どもたちが、げんきの時間にあてをもち意欲的に取り組み、体力向上に努めている。	毎日のげんきの時間に A 90%以上の子が意欲的に取り組んでいる。 B 80%以上の子が意欲的に取り組んでいる。 C 70%以上の子が意欲的に取り組んでいる。 D 意欲的に取り組んでいる子が70%未満である。	げんきの時間の児童観察 児童対象としたアンケート調査	A	A	中間では95.6%、最終は91.3%であった。判定はAであるが若干数値が下がっている。アンケートの結果、高学年で否定的な回答が増えているので、マラソンやなわとびであてを待てるよう声掛けと指導を増やしていきたい。
	家庭と連携し、親子でよりよい生活を送ることができるように努める。	年2回、早寝早起き朝ごはん、テレビゲーム時短の習慣をつけるための健康カードを実施する。さらに、ストレスを抱えている児童の把握し、解消できるように生徒指導と連携しながら保護者の協力を求めている。	保健主事 (市野) 養護 (西野)	健康カード実施期間中は規則正しい生活をしよう意識するようになってきているが、通常の生活においては、生活が不規則になってしまっている児童が各学年に数名いる。また、ストレスを抱える子どもも増えている。	【努力指標】 児童・保護者が規則正しい生活を送ることができるよう努めている。	児童・保護者が規則正しい生活を送ることができよう A 90%努めた B 80%努めた C 70%努めた D 70%未満であった	1・2学期末に児童・保護者を対象としたアンケート調査(健康カード)	B	B	2回の健康カードの結果、規則正しい生活できた割合は早寝が64%から68%に、早起きが64%から72%にあがった。しかし、テレビゲームの時間を減らした割合は、82%から68%に下がった。今後は、学年懇談会でも話題に取り上げ引き続き、家庭との連携を密にしている。
⑤安全指導	災害や不審者に対する児童や教職員の対応実践力を高める。	警察署と連携した「防犯教室」、保護者と連携した「児童引き渡し訓練」、保育所と連携した「保小連携津波想定避難訓練」を行い、児童が「自分の命は自分を守る」ことができるようなスキルを身につけることができるようにする。	教頭(中田) 教務 (鳥屋) 生徒指導(上木)	毎年訓練を実施し、児童の危機への対応力を高めているが、継続して実施しさらに危機に対応する力を育てる必要がある。	【成果指標】 さまざまな訓練で、安全確保のための組織的対応ができている。	A 90%以上である B 80%以上である C 60%以上である D 60%未満である	各種訓練、防犯教室実施後に教職員を対象としたアンケート調査	A	A	今後も、ヘルメット着用の推進に向けての声かけやおたよりの発行、施設設備未修繕箇所早期改修に向けての連絡等にも心がけていきたい。また、今年度実施した訓練での成果を生かし、来年度も、教職員による事前研修の実施や保育園との連携を密にすることを念頭に置き、訓練計画を立てていきたい。
	校内での支援体制を確立し、児童の特性に寄り添った指導や支援方法を共有する。	校内委員会を中心に校内研修会の企画、支援体制の充実を図る。担任や支援員、地域サポート教員との連携を密にし、児童の特性に寄り添った支援方法の共有に努める。	特別支援教育コーディネーター (市野・作田)	各学年に支援を要する児童が数名おり、特別支援教育支援員1人では対応しきれない。また、支援を要する児童の現状やより良い支援策についての話し合う時間や場の設定をより充実させていく必要がある。	【努力指標】 個々の児童の特性を理解し、指導の工夫や支援に努める。	支援策について話し合う時間や場の設定に A 十分努力している B おおむね努力している C あまり努力していない D ほとんど努力していない	教職員を対象に学期ごとに聞き取り調査、検討会	B	B	全員参加の校内支援委員会を定期的に開くことはできなかったが、必要に応じてケースを開き、個々の児童についての支援策を話し合うことができた。支援を要する児童についての情報をまとめ、次年度にしっかりと申し送りをする必要がある。
⑦組織運営・業務改善	各分掌がそれぞれの役割を果たし、「チーム金明」を意識した学校運営をめざす。【10条】	運営委員会やビジョン委員会を定期的に実施し、校長ビジョンの進捗状況や共通理解しながら、組織的な学校運営を実践するとともに人材育成を図る。また、学校評価システムの活性化を図る。	教頭 (中田) 教務 (鳥屋)	各分掌が中心になり運営する部会制を、より幅広い視点からの意見を取り入れることができる運営委員会制にし、また、決定事項を共通実践していく必要がある。各主任がリーダーシップを発揮し、積極的によりよい学校運営に関わる体制作りが必要である。	【努力指標】 PDCAサイクルを活用し、教職員が一体となり、積極的に学校運営に携わっている。	各主任がリーダーシップを発揮し、よりよい学校運営に A 十分参画できている B おおむね参画できている C どちらかというと参画できていない D まったく参画できていない	1・2学期末に教職員を対象にアンケート調査	B	B	「3学期及び新年度に向けての改善策」を根拠として、PDCAサイクルを活用した学校改善を進めていくために、進展の見える化項目については、ビジョン委員会でも十分に話し合い、方向性を決定していった。また、ビジョン委員会でも検討・決定したことを主任を中心に確実に教職員全体に伝達する。今学期は、特に、次年度に向けての改善を意欲し、方策を改善策に書き込んでいき、次年度への申し送り事項とする。
	教員が子供と向き合える時間を主体的に確保し、教員一人一人が持っている力を高め、発揮できる環境を整えていく。	ICTの効果的な活用や事務職員との連携、地域人材の活用を進める。	教頭 (中田) 教務 (鳥屋)	教職員の異動に伴い、引継ぎがスムーズに行われず、校務に時間がかかる現状がある。ICTの効果的な活用や事務職員との連携により、効率的な校務の在り方を構築する必要がある。また、対外行事等において専門的な知識をもった地域の方々の活用を進めていく。	【成果指標】 ICTの効果的な活用や事務職員との連携、地域人材の活用により効率的な校務の在り方を構築することができている。	効率的に校務を進めることが A 十分できている B おおむねできている C どちらかというと不十分である D まったくできていない	1・2学期末に教職員を対象に学校評価アンケート調査	C	C	ICTの効果的な活用や事務職員との連携、地域人材の活用は、ある程度進めることができたが、退校時間目標達成率80%を超えた職員は2割程度であった。個々の目標時間設定がバラバラであることも一因であると考えられる。今後は、学校全体での「最終退校目標時間」を設定し、「削減」「時間確保」「効率化」「意識改革」をキーワードとして、退校時間短縮に向けた取組を提案し、実施していく。
⑧研修	学校研究を中心に授業力や学級経営力向上のための計画的な研修を位置づける。	校内研修会やOJT研修など、組織的・計画的に進める。また、発問づくり部会、模擬授業、交流授業週間等を実施し、教師の授業力向上を図り、共通実践の徹底を図る。	研究推進委員会 (可部谷・鳥屋)	発問づくり部会は、授業の展開や中心発問、深める発問を考える過程で参考となっている。共通理解した授業改善のための大切な指導事項を共通実践する必要がある。共通実践のための手立てをしかりとる。	【成果指標】 教師がめあてを明確にし、児童の思考を深める発問を考えて授業を行う。また、めあて達成できたかを確認する。	A よくできている B できている C あまりできていない D できていない	7月、11月に教職員を対象に調査	B	B	発問づくり部会や指導案検討会、模擬授業等の研修を通して、深い教材研究を行うことができた。発問の工夫が、めあての達成やふり返りの充実につながることを研修を通して学ぶことができた。今後も発問の工夫などを大切にした授業づくりや授業実践を行っている。
	保護者や地域と連携した学校づくりをめざす。	道徳授業や総合的な学習などで保護者や地域の方と共につくる授業を実施する。また、学年懇談会を年2回設定し、目指す学級・授業像(重点目標「やさしい心・強い心」)について児童の様子を保護者と共有し、双方向の交流を行う。	教頭 (中田) 教務 (鳥屋)	学校側からの情報発信が多かったため、保護者や地域の方の参加型授業や外部人材を活用し参加型の授業をしたり、双方向の情報交流をたりする取り組みを行う。	【満足度指標】 保護者・地域の方の参加型授業が A 3回以上実施 B 2回実施 C 1回実施 D 実施していない	保護者・地域の方の参加型授業が A 3回以上実施 B 2回実施 C 1回実施 D 実施していない	保護者・地域の方の参加型授業の実施回数	B	B	1・2学期に、保護者や地域の方の外部人材を活用した授業実践は数回行われたが、参加型授業が十分にできているとは言い難い。今後は、今年度の取組をさらに授業や対外大会に向けて広げていくために、来年度に向けての人材マップを作成する。(陸上大会関係、水泳大会関係、タグラクビー関係、教科GT、道徳授業GT等)
⑩教育環境整備	児童が心安らぎ、学習意欲の向上を図る校舎内外の環境づくりに努める。	各教室前の道徳掲示コーナーや各教室の既習の掲示等の校内掲示で、児童の心に思いやりややる気、元気が生まれ、学習面や生活面に意欲的に取り組める掲示にする。	掲示 (可部谷)	全校で道徳の重点目標にちなんで掲示が教室前掲示コーナーや職員室前の掲示板を利用して行われていた。新聞コーナーでは子どもトピックスを通して新聞記事に関心を向けるようにしている。	【努力指標】 道徳や学習の掲示等で、児童が学習面や生活面に意欲的に取り組む掲示に努めている。	A 十分努力している B 努力している C あまり努力していない D ほとんど努力していない	教職員を対象にアンケート調査	A	B	道徳掲示版「まくら」や企画委員会掲示版「うれい竹」は重点目標に合わせた掲示ができた。学習コーナーでは、各学年の自学ノートの掲示を行い、児童のよい見本になった。今後も児童の励みになるような掲示を行っていく。職員室前掲示版も、各コーナーごと興味関心を持てるような掲示を行うことができた。
	学校関係者評価	【第1回】 ・2学期に修理が必要な箇所については、児童の安全確保の面から早期に対応してもらいたい。 ・児童の登下校等の安全確保のため、見守り隊と連携した連絡体制を構築していただきたい。 ・ため池ハザードマップを利用し、児童に安全面での指導をお願いしたい。	【第2回】 ・働き方改革については、業務削減を意識した取組を進めていただきたい。 ・丁寧な挨拶の仕方が伝統となっている。自己肯定感を育みかけしてほしい。 ・テレビゲームの時間設定ができることを保護者に知らせる場の設定をしていただきたい。	すべて改善を回っている	・自分の目標設定が高いために、自己肯定感が低くなることも考えられる。 ・ふるさと教育を今後も推進することを望む。 ・ネットの短時は、視力低下や体調不良等の健康面から具体的に指導することに望む。	3学期・来年度に改善を推進				